

## [029\_1986]第二十九回中央図書館貴重文物展観目録 ： 細川文庫の勅撰和歌集

九州大学附属図書館中央図書館

今西， 裕一郎  
九州大学文学部： 助教授

<https://doi.org/10.15017/1485017>

---

出版情報： 大学広報. 584, pp.1-6, 1986-09-27. The Committee of Public Relations Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 大学広報

No.584

昭和61年9月27日発行  
(編集)  
九州大学広報委員会

## 第二十九回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

### 細川文庫の勅撰和歌集

#### はじめに

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展観資料の選定、解説、配列等については文学部中野三敏教授及び今西裕一郎助教授に御指導御尽力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

#### 記

展観場所：中央図書館メインロビー

展観期間：昭和61年10月2日(木)から

昭和61年11月29日(土)まで

## 展 観 資 料 の 解 説

細川幽齋といえば、安土桃山時代の武将であると同時に、他方、古今伝授にも携わって数多くの和歌に関する著述を残した文武兼備の文人として、つとに著名であるが、その幽齋を曾祖父と仰ぐ、宇土細川家の行孝も、幽齋の遺風を慕い、みづから和歌を詠じ歌書を編むという文人であった。本学附属図書館蔵の細川文庫は、その行孝以来の宇土細川家の蔵書を収めるものである。今回はその中から、和歌資料の中心というべき勅撰和歌集を選んで展示する。他に、行孝の編著を一点と、勅撰集資料として注目すべき本学支子文庫蔵の一点とを加えた。なお、細川文庫の全貌については、文学部国語国文学研究室編「語文研究」第8号（昭和34年2月刊）所載の「九州大学  
図書館蔵細川文庫目録」を参照されたい。

## 1 古今和歌集

縦 16.5 cm、横 13.0 cm、列帖装。一冊。墨付 140 丁。本文料紙は鳥の子。三条西実隆写。古筆 畠山牛庵の極札を付し、二重箱に納められている。

本文は、定家本系のうち最も流布している貞応二年（1223）本で、本書の素姓は、その奥書から次のごとくと知られる。すなわち、まずは、卜部兼好（1283?～1352以降）が、元享四年（1324）十一月に二条家証本を借りて書写、加点、校合、さらに、建武五年（1338）閏七月再校した伝本があり、次に、この兼好筆本が、その後三条実量（1415～1483）の所持に帰している間に、冷泉家流の為尹卿奥書本、二条家流の堯孝法印自筆本による校合等が行なわれた。そして、この兼好筆実量旧所持本を、文明十八年（1486）十一月に三条西実隆（1455～1537）が書写、校合したものが、本細川文庫本である。

多くは他からの要請によってしばしば『古今和歌集』を書写した実隆が、中で家蔵にしていたとおぼしい本書が、いかなる経路で細川家所蔵となったのか定かではないが、可能性としては、実隆より公条、実枝を経て幽齋へと至る直流古今伝授に関して相伝されたものと想像してみることができる（田中道雄「兼好の古今受講について — 細川文庫蔵  
三条西実隆筆『古今和歌集』奥書の報告 —」・在九州国文資料影印叢書2『古今和歌集』解題 — 後藤昭雄執筆 — 参照）。

## 2 後拾遺和歌集

大本（縦 25.4 cm、横 17.5 cm）、列帖装二冊一面 10 行書。墨付、上巻 104 丁、下巻 114 丁。本文料紙は斐紙。奥書識語無し。二重箱に納められ、外箱は桐、蓋中央に『後拾遺和歌集』の題、内箱は漆塗、蓋中央に螺鈿で『後拾遺和歌集』の題あり。内題『後拾遺和歌抄』。初代古

筆了仲による宝永三年(1706)季冬上旬の極状があり、それによれば、外題は冷泉為和脚、本文は飛鳥井雅綱脚筆。

冷泉為和(1485～1549)は室町時代の歌人、冷泉為広の子、正二位・大納言、家集に『為和脚集』がある。

飛鳥井雅綱(1489～?)は室町時代の歌人、飛鳥井雅俊の子、曾祖父の飛鳥井雅世、従一位・権大納言、没年は未詳だが、永禄元年(1563)七十五歳で出家、法名は高雅。飛鳥井家は代々和歌及び蹴鞠を家職とする家柄だが、書もよくし、雅綱は祖父雅親が開いた栄雅流の能書家。

### 3 金葉和歌集

大本(縦24cm、横17cm)、列帖装。一冊。題簽なし。本文料紙は斐紙。墨付117丁。一面10行書きで、詞書・作者名と和歌は別行に書く。本文とは別筆で烏丸光広(1579～1638)の慶長十四年(1609)の奥書があり、室町末期の公卿中御門宣秀(1469～1531)の書写であるという。箱の上蓋裏に、畠山牛庵と古筆了珉の極札が貼付されており、宣秀筆、光広奥書の旨が記されている。また、屋代弘賢(1758～1841)署名で、当本が初度本であり、「世間比類のない」ものだと記した紙も添えられている。当本は『統群書類従』所収本の祖本であることが判明しているが、類従本は永い間初度本と考えられていたという事情があり、弘賢も誤認していたのであろう。実際には、本文は初撰二度本系統のひとつで、歌数の最も多いものである。(平沢五郎著『金葉和歌集の研究』参照)。

### 4 金葉和歌集

大本(縦24cm、横17cm)、列帖装。一冊。題簽なし。墨付111丁。一面10行書きで、詞書・和歌と作者名は別行に書く。奥書はない。表紙見返しに、琴山の極札が貼付してあり、それによると飛鳥井雅春(1520～1594)の筆という。飛鳥井家は蹴鞠・和歌の家として代々栄えたが、雅春の曾祖父雅親以後は、書の家としても名をなした。雅春は初名を雅教と言い、天正十九年(1591)、雅春と改名した。秀吉の和歌の師範をつとめたこともあり、『一日百首』等の歌集や蹴鞠の著作が伝存している。

本文は精撰本系二度本で、初撰二度本とは所収歌・詞書等に若干の相違がある。

### 5 詞花和歌集

半紙本(縦22.4cm、横14.5cm)、袋綴一冊、一面8行書、墨付83丁。本文料紙は楮紙。奥書識語無し。桐箱に納められ、蓋に「詞花和歌集、堯孝門弟堯憲筆」と墨書、題簽なし。

堯憲（生没年未詳）は室町中期の歌人。常光院、地藏院と称し、晩年三省と号した。清水谷公知の子、実久（1432～1498）の弟、堯孝（頓阿の曾孫 1391～1455）の養子となる。長祿三年（1458）幕府月次会に参じ養父の遺蹟を嗣ぎ、和歌所開闢と称す。文明十五年（1483）息子の堯盛に常光院流を嗣がしめた。文亀二年（1502）四月には越前一乗谷で生存。明応二年（1493）歌学書『和歌深秘抄』を著し、常光院流が二条家歌学の中でも正当派であることを強調したが、彼自身の和歌は『室町殿月次』『公宴続歌』に散見する程度である（井上宗雄『中世歌壇史の研究』室町前期参照）。

## 6 詞花和歌集

大本（縦 25.5 cm、横 17.2 cm）、列帖装。一冊。一面 9 行書。墨付 77 丁。本文料紙は斐紙。奥書識語無し。桐箱入り、箱蓋に「栄昌院様御譲物」とある。見返しに畠山牛庵による「詞花和歌集 飛鳥井雅綱脚」の極札と初代古筆了仲による「飛鳥井雅綱脚 詞花和歌集」の極札とを有す。

飛鳥井雅綱（1489～？）は飛鳥井雅俊の子、従一位・権大納言、詳細は『後拾遺和歌集』の解説を参照。

## 7 千載和歌集

大本（縦 24.2 cm、横 17.5 cm）、列帖装。二冊。一面 10 行書。墨付、上巻 65 丁、下巻 96 丁、下巻裏表紙無し、本文料紙は斐紙。奥書識語無し。上巻表紙に「幽斎御筆ナルヘシ」の貼り紙があるが、確証はない。あるいは、細川家の祖である幽斎の自筆本として宇土細川家に大切に伝承されてきたものか。

## 8 新古今和歌集

支子文庫本。大本（縦 29.5 cm、横 19.2 cm）、一冊。一面 11 行書。墨付 75 丁。本文料紙は厚手楮紙。仮名序から巻六までの零本で奥書識語等もなく、もと上中下三冊本の上巻のみ残ったものと考えられる。古筆朝倉茂入の極札が付され、細川持之の写とする。

細川持之は、室町幕府の管領で、細川満元の子。永享四年（1432）斯波義淳に代わって管領となる。嘉吉元年（1441）六月、六代將軍足利義教が赤松満祐によって弑殺されるや、大内持世らとともに義教の子義勝を立てて主とし、七月、旨を奉じて播磨に赴き満祐を討った。応永・永享期歌壇における代表的な武家歌人のひとり、『新統古今和歌集』には四首の入集をみる。嘉吉二年（1442）八月没、年四十三。

9 八 代 集

大本(縦 24.0 cm、横 18.0 cm)、列帖装。八冊。近世初期写。一面 10 行書。本文料紙は斐紙。全八冊の内訳は、『後拾遺和歌集』上下各一冊、『金葉和歌集』一冊、『詞花和歌集』一冊、『千載和歌集』上下各一冊、『新古今和歌集』上下各一冊で、所謂三代集を欠く。

うち奥書を有するのは『金葉和歌集』のみで、それによると、承安五年(1175)五月から安元三年(1177)八月に至る間、六条頭家(1153~1223)が俊頼自筆本等をもって校合書写した同集の伝本が、頼阿(1289~1372)の手を経て、文安五年(1448)二月某人物により書写された経緯が知られ、本八代集本『金葉和歌集』は、さらにその転写本であることが判明する。なお、本書と同じ頭家及び頼阿の奥書をもつ『金葉和歌集』の伝本には、ほかに陽明文庫蔵八代集本、柳原業光筆本等があり、本文系統は、二度本精撰本系第二類に属する(平沢五郎著『金葉和歌集の研究』参照)。

10 風雅和歌集

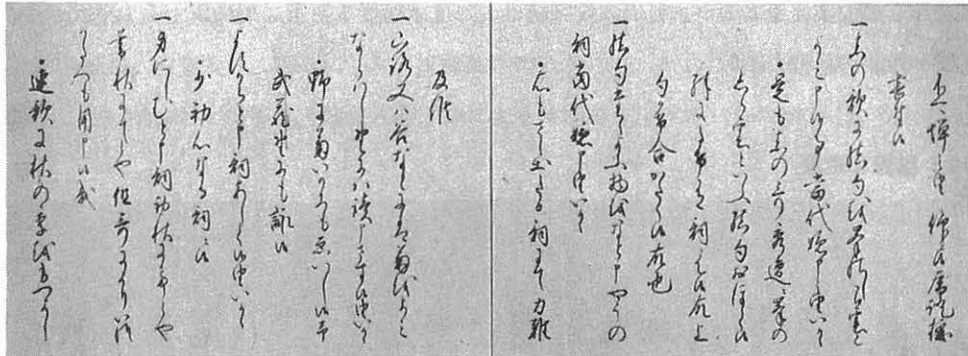


大体(縦 26cm、横 17 cm)、列帖装。二冊。題簽なし。本文料紙は鳥の子。墨付上 136 丁、下 149 丁。一面 10 行書きで、詞書・作者名と和歌は別行に書く。本文とは別筆で、墨書の書き入れがある。奥書はないが、伏見宮邦高親王(1456~1532)の筆とする。丙子十二(文化十三・

1816)の古筆了意(1751~1834)の極札が添えられている。邦高親王は貞常親王の第一皇子で、後土御門天皇(1442~1500)の猶子となった。伏見宮家第五代の当主で、琵琶・和歌に秀でていた。邦高親王の自筆としては、高松宮家蔵河内本『源氏物語』蓬生巻、近衛家伝来『大手鑑』の『拾遺集』色紙などが伝存する。この細川文庫本を比較するに、書体は非常に類似しており、親王自筆と認められよう。

当本の本文は、巻頭に真名序・仮名序をおいた第三類本で、新編国歌大観の底本に採られている。

### 11 続 耳 底 記



横本(縦15.9cm、横23.1cm)、一冊。墨付142丁。成立年は未詳。細川行孝は烏丸光広の孫、資慶に師事し、歌学を修めたが、本書は、行孝が資慶に教えを乞うた質疑を記録したもので、近世初期における大名の学問の実態を伝える貴重な資料である。書名は、資慶の祖父光広が、行孝の曾祖父細川幽斎に聞くところを記して成った『耳底記』に因むもので、この書名からも行孝の曾祖父幽斎への敬慕、歌道への執心が窺われる。なお、本学図書館には、別に萩野文庫蔵の一本がある。